（前ページから続く）

映像上映では１０年前の震災の悲惨な状況が映し出され、自助努力もさることながら、多くの人々の援助協力により今の神戸の復興があることを思い出させられたが、足を止める人は少なかった。

震災は忘れた頃にやってくる！というが、震災の経験や教訓を風化させないためにもいろいろ考えさせられることが多かった。

国際部会々員による手作りのポスターは構成抜群の色鮮やかな作品であり、参加団体より次年度紹介ポスター作成の参考にしたいといわれた程である。作成に携わっていただいた部会員に紙上を借りて感謝申し上げる。

訪れた人の中には、自分も将来シルバーカレッジに入り国際交流について勉強したいという人や、自分の祖父母に入学を勧めたいといった若者もいて、３５人余りの少ない来訪者にもかかわらず意を強くした次第である。

私たち国際部会は、フエアに参加した国際交流・協力に各種団体からいろいろ学ぶことがあり、今後ともこのような催しをつうじて友好の輪を広げるとともに、連携協力して活動を進めたいと考えている。

本年はフェアのＰＲ不足で来場者が少なかったが、２００８年の春、同じ催しが開催されると思われるが、展示出品にさらに工夫を重ね、私たち国際部会の活動が、広く一般市民にアピールできるような発表につながるように頑張って行きたい。

◆

日本の昔遊びを外国人学校の生徒たちに紹介

国６-国　黒田 宏

昨年まで行ってきた長寿社会開発センターからの助成金による日本文化の伝承事業を、ことしは親子の世代間の伝承だけでなく、外国人へ紹介することも含めるように対象を拡大した。その一環として昔遊び塾を神戸市内の外国人学校の子供たちを対象に開くことにした。

学校当局と折衝の結果、マリスト国際学校とカナディアンアカデミーが受け入れてくれることになり、マリストは２月７日（月）、カナディアンアカデミーは２月 22 日(火）に文化部のむかしあそび研究会のメンバーと国際部会のメンバー（通訳担当）が出向いて実演や指導を行った。

子供が真剣な顔付きで取組む姿は良いもので、外国の子供たちが繰返し繰返しトライし、できるようになったときの喜びの顔はどこの国の子供も同じである。実技が主体だったため通訳の必要も殆どないまま心を通わすことができた。従来しあわせの村やＫＳＣ内で開催してきた「昔あそび塾」は時間をたっぷり（３～４時間）かけ、子供たちが遊びのコーナーを自由に往来できたが、マリストおよびカナディアンの場合いずれも「日本文化週間」における授業の一環として組み込まれているため、時間に制限があり、自由にコーナーを巡ることはできなかった。カナディアンでは、学年別グループごとに時間を設定し、各コーナーを一定の時間内に順序良く体験しながら回れるようにした。

マリストでは、グループ分けはなかったが、小学生と中・高校生の二つに分け、時間帯を変えてあそびに挑戦できるようにした。

従って生徒によっては同じものに時間を割いて挑戦できた。一方カナディアンの場合、短時間ではあるが全員が一通り全部のあそびを体験できた。子供達にとってどちらが良かったのか今後の課題である。

マリスト国際学校の場合、昨年の「日本文化週間」において開催の予定であったが、先方の都合で中止となり延期されたもので、ことしは予定通り２月７日(月)に開催することができた。

昔あそびには生徒たちだけでなく、先生たちも童心に返って竹馬、コマ、ブンブンコマ等々に盛んに挑戦して楽しんでいた。

カナディアンでは竹馬で遊ぶことはすでに実施されていたようであるが、日本の竹馬は初めてのようであった。すなわち我々は足を乗せる部分を足の裏に平行にして乗っているが、彼等は足の裏に直角になるように足乗せを左右に向けて歩いていた。どちらが乗り易いのだろうか？こんな些細なことでも洋の東西でやり方が違うのに驚き、また国際交流の必要性も感じさせられた。

後日カナディアンアカデミーから訪問に対する子供たちのお礼の手紙が送られてきた。１００通を上回るすべてを照会することは紙面の都合上できないが、一部を別項に掲載したのでご覧頂きたい。

◆